

18. 福沢諭吉ならどうする—現世に甦った諭吉からのメール

(この章はフィクションです)

私の所属している NPO の事務所は東京港区西新橋にあります。旧い町名では田村町、佐久間町といった大名屋敷の名残が残っていたところでした。少し、南にいくと御成門から芝増上寺の境内に入ります。まだ、鬱蒼とした木々が茂り、夕暮れ時など走り去る車のライトが消えるとふっと昔の幻想的光景が浮かびます。芝から三田へ、高いビルが立ち並びますが地形はあまり変わっていないのです。その先は慶応義塾大学に通じます。

17 章までをなんとかまとめてさてどうしようかと迷っていました。とある日の夕方、私は考えながら散策していました。書き上げた 17 章を福沢諭吉ならどうしてだろうか……。すれ違った人影がありました。背の高い、白の上下、ステッキを持っていたようでした。端正な顔—といっても薄暗い中でわかるはずがありません。……。まさか福沢諭吉ではないのか……

福沢諭吉に評を書いてほしい—そんなことができるのか。諭吉の没年は 1901 年、「学問のすすめ」の最終章は 25 年前の 1876 年の著であり、凡そ 1 世紀半前のことである。私は思い直しました。現代には web という通信手段がある。この方法で時空を超えて、諭吉の評が得られないか。

福沢諭吉からのメール

「セルフメディケーションのすすめ」について批評の依頼受けました。拙著の「学問のすすめ」と共通性があること、真理は時空を超えて共通なこと、また私が 6、7 編刊行時に世間の酷評、物議に抗して自ら五九楼仙万の筆名で「学問のすすめ」の評をしたことなどを挙げておられる。前 2 者はその通り、自評については世間の反応も問うていない段階でいかなものかと思うが、以下私の考えを述べることにする。

(1) 対象の特定があいまい

拙著の「学問のすすめ」の初編は明らかに日本人すべてを対象とした。旧来の封建制度のもとでは日本人は生まれながらに身分が定められていた。時あた

かもそれが瓦解し、人は生まれながらの貴賤上下の差別がないのが当然となったのである。しかし、人は皆均一ではないことは誰もが知っている。その差は学問をするかしないかの差による。ならば均等な機会を得たならば学問をすることによって上を目指せと述べた。学問をするといっても能力に差があるのは知っている。学問とは実学のことで、それを全うするのは私学にしかできない。官(政府)に対して実学に基づく政策を実施させるのが目的である。

「セルフメディケーション」が本人および時の政府にも効用があると説くのは理に適う。しかし「すすめ」を実施せよという対象は誰か。「学問のすすめ」の対象は生まれながらに差別はない日本人の中のリーダーとしたが、「セルフメディケーション」の対象はその効用を享受するのは本人でなければならない。この違いを貴著ではあいまいなままで、説得力に欠ける。

(2) 政策担当の政府への批判が甘すぎる

国民と政府の関係について私はきっちりと述べた。国民が政府を選ぶのであって、政府は国民の委託を受けて成立するのだ。だから費用負担として国民は税を負担しろとした。政治家や官僚が費用ねん出の事業などやって成功するわけがない。貴君は第4章で健康維持は政治家に頼れないと指摘したが、国民が託した国家の責任についてもっと強く批判すべきだ。官や政治家の発言をみると「社会保障は維持しなければならない」と言いながら、あたかも仕方がないからやるとよそごとのように聞こえる。逆に野党の中には財源の確保などほったらかしで「社会保障」を金科玉条に唱える無責任な者もいる。「セルフメディケーション」をすすめるなら、国民の意志としてその具体的施策を「政府」に構築させ、国民も義務として何を行うべきかを示せ。骨太政策とか訳もわからぬ絵に描いた餅で、ニセ紳士ばかり作っても、犬も喰わないにきまっている。

(3) 日本は独立国として評価できるのか。

それにしても日本はどうしてちっとも変わらないのか。私は4編で日本の文明に危惧を抱き、国の独立は全うできるか案じた。私は日本人に一番欠けているのはライト(権義)を守る精神であると指摘した。貴著の「すすめ」では健康という各個人のライトをいかにして守るべきかと説いている。私は「学問のすすめ」

で「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」と万人平等を説いたが、中村は「西国立志編」で「天は自ら助くるものを助く」と自主独立の精神を促した。著作は明治5年(1872年)、幕藩政治が崩壊し国民が造る新しい国が出現したが、国民の独立心が懸念であった。この国では独立を人民が力でかちとった歴史はない。いつも降ったように「独立の機会」がくる。黒船が来て幕府が崩壊する、連合国が勝利して軍閥が亡び、民主日本が生まれる。恩恵は常にいつか来るものと期待して待ち続ける習性が根付いてしまったようである。明治維新後に心配したことは平成の世でも続いているのは、世界から日本は独立国なのか、日本人は真に独立の気概を持っているのか厳しく評価されよう。

平均寿命 80、超高齢社会である故に、健康で尊厳ある社会を実現し、世界の範たるべく啓発していく責務が日本人にあることを私からも念を押しておきたい。

追伸

貴君の「セルフメディケーションのすすめ」17章の web 連載の最終章が掲載された時、熊本で大地震が発生した。東日本大地震から 5 年、あらためて日本は災害大国であることを痛感した。災害に共通する点はあるものの、長期に地震が継続するなど予期せぬ事態への即応も課題だ。インフラ、経済の再生も急務ではあるが、日常の備えと自立の精神の啓発が基盤である。日本国民の健闘を願っている。